

# 循環する物語

——『榻嶋暁筆』巻二十三「鼠物語」を巡って——

小 椋 愛 子

## 一、はじめに

『榻嶋暁筆』の結び、巻二十三の最終話に「鼠物語」がある。『榻嶋暁筆』中、最も長編であり、その説話の冒頭「もとよりこれは榻嶋のはしがき嶋のはねがき、暁ごとに書あつめ侍らんとこの事に侍れば……」が『榻嶋暁筆』の書名の由来とも考えられており、重要な説話と思われる。これは、鼠の両親が一人娘に立派な簪を取りたいと、天から築地まで簪を探し回る話で、初めに太陽、「日天子」の所へ頼みに行くが、「日天子」は自分は雲にかなわないと雲を薦め、さらに「雲」は「風」、「風」は「築地」、「築地」は「鼠」をそれぞれ自分がかかわないものとして薦める。そして、ついには、鼠がこの世で一番優れていることがわかり、鼠を簪に取るという話である。いわゆる昔話で知られる「鼠の嫁入り」<sup>①</sup>の話で、『沙石集』に類話がある。

しかし、『沙石集』が、鼠が娘簪を探す、粗筋のみを述べるのに対し、『榻嶋暁筆』の「鼠物語」(以下「鼠物語」とする)は、その簪探しの骨子に様々な説話を、例として、たとえば、「日天子」などを簪候補に考えた「理由」、鼠が自分たちが優れた種族であるという「由来」、他の種族と婚姻することは、特異なことではないという「証明」等を付け加える。

本稿では、例として付加する説話の引用の方法から『榻嶋暁筆』における「鼠物語」の意味を考えたい。

## 二、「鼠物語」の構成

「鼠物語」と類似の書名は多く見られ、江戸時代に、赤本『鼠の嫁入』(刊行年未詳、鶴屋版)、『鼠のゑんぐみ』、黒本『鼠の嫁入』、黄表紙『千秋楽鼠の嫁入』などがある。しかし、その内容は「鼠」

を主人公にして結婚までの手順、結婚の儀式の次第を描いたもので、「鼠物語」と内容は全く異なる。これらは、嫁入りの啓蒙書、女子教育としての性格が強いとされる。また、『鼠の嫁入り』は『葉師通夜物語』（『福齋物語』）の異名としても用いられるが、これも本話とは全く内容を異にする。

本話の類話は、『沙石集』のみ。『沙石集』巻八・二二「貧窮ヲ追タル事」の「分をわきまえよ」という教訓中、それを強調する例の一つである。『沙石集』の諸本間で異同がある箇所、略本系諸本のみに見える短い記事である。『楊嶋曉筆』所収の説話の多くが、典拠を有しており、さらに『楊嶋曉筆』中、『沙石集』を典拠とした説話があることから、「鼠物語」はこの『沙石集』の説話を参考にしていると推測できる。次に全文を挙げる。

鼠く、女ヲ儲テ、「天下ニ無レ並聲ヲ取シ」トテ、ヲウケナク思企テ、「日天子ノ世ヲ照シ給ヘハ日出シ」ト思ヒテ、朝日ノサシ出給ワニ、「娘ヲ持テ候。御日形ナタラカニ候。進セン」ト申シ、「我ハ世間ヲ照ス徳有レトモ、雲ニ遇ヌレハ、光モナク成也。雲ヲ聲ニ取レ」ト仰ラレケリ。

「誠ニモ」ト思ヒテ、黒キ雲ノ見ユルニ相ヒテ、此由ヲ申シ、「我ハ日ノ光ヲモ隠ス徳有レトモ、風吹立ラレヌレハ、何ニテモナシ。風聲ニ取レヨ」ト云。

「サモ」ト思ヒテ、風ノ吹ケルニ向ヒテ、此由ヲ申シ、「我雲ヲモ吹キ、木草ヲモ吹ナヒカス徳有レトモ、筑地ニ遇ヌレハ、筑地聲ニセヨ」ト云ケレハ、「ケニモ」ト思ヒテ、筑地ニ此由ヲ云シ、「我ハ風ニモ不動徳有トモ、鼠ノホラル、時、難レ堪也」ト云ケレハ、「サテハ、鼠

何ニモ勝レケリ」トテ、鼠ヲ聲ニ取テケリ。是モ定レル果報ニコソ。

『沙石集』では、聲を探す順序、「日天子」が「雲」を、「雲」が「風」を、「風」が「築地」、「築地」が「鼠」を薦めること、そして、ついに鼠を聲に取るという筋に重点を置く。そのため、聲候補が、次のものを薦める理由をも簡潔で、また、鼠は、次の候補を薦められると、「サモ」、「ケニモ」とすぐ納得し、その心中を語らない。それに対し、「鼠物語」は、その聲探しの筋に、関連する事柄を例として付加する。「鼠物語」の梗概と構成は次の通りである。

① 「鼠」の話を述べる動機

「老のねざめの明やらぬに、仏の御名をとなへぬだにあるに」とし、次に「もとよりこれは楊のはしがき嶋のはねがき、暁ごとに書あつめ侍らんとの事に侍れば」と書名の由来を説く。そして「後見人もおもひゆるさせ給ひ侍れかし。」と鼠の話を挙げる動機を説明する。

② 昔、夫婦の鼠がおり、一人娘をかわいがる。

○親が子を大事に、慈しむことは、身分、種族を問わない例を挙げる。〔後撰和歌集〕の雑一・「兼輔」の歌を引いた後「鼠」が子を思う気持ちを詠んだ長歌、それに対する反歌を付し、和歌でまとめ

③ 娘の聲に「日天子」が最上だと考え、使者を派遣する。

鼠夫婦が、その使者に「日天子」を説得する口上を直接話法で語り、会話の中に例を挙げる。

○日天子の宮殿の形容の例○他の種族と結婚する例○「鼠」が貴い生き物である例を付加する。

④「鼠の使者」が「日天子」を訪ね、聳になってくれるよう頼む。

「日天子」は自分は「雲」にはかなわないと「雲」を聳に薦める。

○会話文の中に「日天子」は、自分が偉大であることの例、「雲」にかなわなかった例を付加する。

⑤使者が「鼠夫婦」に結果を報告する。「鼠夫婦」は不本意だが、「日天子」の薦めの為、納得する。

○鼠夫婦が心情を使者に語る中に「雲」の短所、長所の例を挙げる。

⑥「使者」が「雲」を訪ね、聳になってくれるよう頼む。「雲」は自分にはかなわないと「風」を薦める。

○会話の中で「雲」が自分が偉大であることの例、「風」にかなわない例を挙げる。

⑦使者は、「鼠夫婦」に結果を報告する。「鼠夫婦」は不本意だが、「世中は何事も十が十ながら心のまゝなる事やはある」と納得する。

○鼠夫婦の心内語の中に「風」の悪行の例を挙げる。

⑧「風」に使者を送る。「風」は「築地」にかなわないと「築地」を薦める。

○会話の中に「風」が偉大であることの例、「築地」にかなわない例を引く。

⑨鼠夫婦が結果を聞く。「築地」は「元来、土くれ」だとして、聳に

認められない由を独白する。

⑩「築地」が鼠の言を聞き、怒る。

○「築地」は自分が偉大であることの例を独白の中で挙げる。

⑪鼠夫婦は「築地」が怒っていること、また、「築地」の言を聞き、「築地」を認め、使者を送る。

⑫「築地」は⑩の独白の中で挙げた例を要約して引き、それでも

「鼠」にはかなわないと、「鼠」を薦める。

⑬「鼠」を聳に取り、行く末案える。

⑭教訓 これは、歌道でいう「初心に帰れ」の教えと同じと説く。こ

れを仏教の教えに置き換え、これは大師の云う「凡夫発心、尚与妙覚、畢竟不二」又は「発心畢竟不二別」に当たると強調する。

⑮結語 以上の「彼鼠の狂言綺語のたはぶれ」を以て、これを「菩提の讚仏乗の因、転法輪の縁」とするとし、「後見人あな

がちにそしり給ふべからずとなん。」と結ぶ。

以上、『沙石集』に比べて、聳を探し訪ねる筋に、例としてその理由、由来等を加え、この説話を解釈する。また、全体の例の中でも梗概③の鼠が貴く、「日天子」とつり合う種族であることを強調する例の数が格段に多い。鼠が「日天子」を別格扱いしていることがわかる。さらに構成面では、三番目の「風」までは、鼠が「使者」を派遣し、聳候補と会話をし、鼠に報告するという同じパターンをとる。また、この三者が他を薦める論理展開も同じである。さらに、

表現も、たとえば、鼠が雲に対して「陰陽聚而為雲と申しめり」、風に対して「陰陽怒而為風と申めれば」など、前を意識し、対応させる。くり返しであり、同じパターンであることを強調する。それに対し、四番目の「築地」では、鼠の言を「築地」が聞いて怒るといふ、今までとは逆の形をとる。さらに、二者の会話を機能として話が展開したが、ここでは独白を聞くという形で、話を展開させ、構成に変化を付ける。また、築地が怒ったため、鼠が態度を改めるといふ、世俗的な解釈をする。

「鼠物語」が、一話の構成を考えていたことは、梗概①で「後見人人もおもひゆるさせ給ひ侍れかし。」と話を始め、梗概⑤で「後見人あながちにそしり給ふべからずとなん」と結び、物語の初めと終わりを対応させていることから明らかである。さらに、それは、この話の内容、「元に戻る」という教訓に合う構成を意識する。『楊鳴曉筆』全体においても「鼠物語」で、初めて書名の由来を説き、最終部で、書名を出す作品の体裁を念頭に置いていたことは明らかであり、さらに、結語の「狂言綺語のたはぶれ」を仏の縁とすると表現は、全体を締めくくる表現であり、作者が「鼠物語」を最終話と為す意識を有していたことがわかる。

### 三、重複する記述

前章で、例を多く付加することを確認した。次に、その付加して

いる例について考察したい。「鼠物語」の例のうち、その例の内容が、既に『楊鳴曉筆』中の別の箇所て記述されているものが、十数例ある。ここでは、『楊鳴曉筆』中に既に記載があり、重複する内容を持つ例を中心に考察する。

(i) 「又毘舍離国の大王は迦蘭陀と云鼠のつけに由て毒蛇の害をのがれ給ふ。迦蘭寺の因縁あらた也。」の記述

これは前章の梗概③（以下、番号は前章の梗概を指す）に付加する、鼠が貴い生き物であることを説く例の一つである。この一文では、鼠がどのような働きをしたのか、また、何が因縁なのか理解が難しい。この「毘舍離国の鼠」の話は、巻九（似類）・第十五「毘舍離国鼠」に詳細な記述がある。

巻九・第十五「毘舍離国鼠」は、本文の割り注に「善見律、経律異相心也。」とあり『経律異相』第四十七・第十四（鼠の部）第一「鼠濟毘舍離命」が典拠と考えられる。また、『経律異相』はこの説話の典故を「出善見律毘婆沙第六卷」と明記しており、これは、この巻九・第十五「毘舍離国鼠」の割り注に合う。

『経律異相』の「鼠濟毘舍離命」は、迦蘭陀という名の鼠の話。大毒蛇が木の根元で、寝ている王を害そうとするが、それを察した鼠の迦蘭陀が必死に王を起こし、王を助ける。王は感謝し、ある村を鼠の禄とし、その村名を迦蘭陀とする。そして、その村にいた長者を迦蘭陀長者と名付けたというもの。鼠の話であると同時に村名

の由来譚になる。『経律異相』は、「佛言。」とした後、「迦蘭陀耆是山鼠名」とすぐに鼠の話が始める。

それに対し『楊鳴曉筆』巻九・第十五「毘舍離国鼠」は冒頭「天竺毘沙離国に迦蘭陀精舎といふ寺あり。」と初めに寺名を出す。その後、この「迦蘭陀鼠」の話を書き記す。その後、別の話を「又三蔵伝に云……」として続け、全体を「迦蘭陀寺」の寺名の由来譚として総括する。これは、この話が「似類」の巻に所収されていることに関係する。この巻九「似類」の巻は、二話一類形式を取る。この前話、第十四は「犬神明神」の説話で、犬が飼い主を大蛇から守るが、その場で死んだ為、その場所に祠を建てた。それが犬神明神であり、その故事からこの地方を犬上郡と呼ぶという、神社・地名の由来譚である。第十五の「毘舍離国鼠」も前話との関わりから、寺の由来譚を意識し「迦蘭陀寺」を冒頭に押し強調するといえよう。『経律異相』に、寺の記述はない。次に比較するが、『経律異相』は、『大正新脩大藏経』巻五十三「事彙部」を用い、原文の後、私に書き下し文を付す。王が蛇にねらわれるまでを

時毘舍離王。將諸伎女入山遊戯。王時疲倦眠一樹下。伎女左右四散走戯。時樹下窟中有大毒蛇。聞王酒氣出欲螫王。(『経律異相』大藏経卷五十三 P253・上 123-26)

(時に毘舍離王、諸の伎女を將ひて山に入りて遊戯す。王時に疲倦し一樹の下に眠る。伎女左右に四散し走り戯る。時に樹下窟中に大毒蛇有り。王酒氣を聞きて出でて王を螫さんとす。)

循環する物語 (小椋愛子)

時に大王山中に御幸あり、大樹の本にすこしねぶらせ給ければ、大毒蛇有て大王を害し奉らんとす。(『楊鳴曉筆』)

と、『経律異相』が、王が山に来た理由、伎女達の様子、大毒蛇がきた原因を述べるのに対し、『楊鳴曉筆』は、伎女や、酒気には触れず、王、蛇の状況のみを記す。また、これは、『楊鳴曉筆』が、典拠を引くときの特徴であるが、貴人に対しては、必ず敬語を用いるため、ここでは、王に対して、「大王」と接頭語をつけ、「御幸」、「ねぶらせ給ければ」、「奉らん」など、敬語を用いて、要約する。さらに『経律異相』は続けて

樹上有鼠從上來下鳴喚覺王。蛇即還縮。王覺已復眠。蛇又更出。鼠復鳴喚下來覺王。王起見大毒蛇。即生驚怖。求諸伎女又復不見。(53・P253・上 126-29)

(樹上に鼠有りて上より下に来たる。鳴きて王を喚び覺ます。蛇即ち還た縮む。王覺め已に復た眠る。蛇又更に出づ。鼠復た鳴きて喚びて下り来たりて王を覺ます。王起きて大毒蛇を見る。即ち驚怖を生ず。諸の伎女を求むれども又見えず。)

と、鼠と木の上にいる毒蛇の行動を関連づけ、その様子を詳しく述べるのに対し、『楊鳴曉筆』は

此木のもとに鼠あり。来て鳴騒ぎければ、大王眠を醒し毒蛇の害を免かれ給へり。

と、その骨子、鼠が王を起こして助けたことのみを述べる。『楊鳴曉筆』は、鼠が王を助けた事実を置き、蛇と鼠との緊迫し

た相関関係は重要でなかったのであろう。また、村名を決める箇所を

時山邊有村。即命村中。自今以後我之祿限悉迴供鼠。因此鼠故即號此村迦蘭陀也。  
(53・P253・中L1-3)

(時に山の邊に村有り。即ち村中に命ず。今より以後我の祿の限り悉く迴して鼠に供へよ。此の鼠の故に因つて即ち此村を迦蘭陀と號するなり。)

此一村をもて彼山鼠の食供にあて給ふ。是によりて此所を鼠の名によせ、迦蘭陀樹と名づく。  
(「楊鳴曉筆」)

と、「楊鳴曉筆」は、「食供」の語を用い、わかりやすく要約する。「楊鳴曉筆」は「此所を鼠の名によせ、迦蘭陀樹」とするとしており、これは王の眠っていた「樹」を指すか。但し、村の名を「迦蘭陀村」と名付けたとする『経律異相』の読みを「楊鳴曉筆」が踏襲していることは、次の部分、

是時村中有一長者。有金錢四十億。王即賜長者位。因此村名故號迦蘭陀長者。  
(53・P253・中L3-5)

(是時村中に一長者有り。金錢四十億有り。王即ち長者に位を賜ふ。此の村の名に因りて、故に迦蘭陀長者と號す。)

此村に独の長者あり、金錢四十億居せり。大王彼に長者号を賜ふに、此村の名によせて、迦蘭陀長者と名付給ふ。  
(「楊鳴曉筆」)

から明らかである。また、「楊鳴曉筆」は「金錢四十億」、「長者号を

賜ふ」など、原文に忠実に、出典まで明記する。

この巻九・第十五「毘舍離国鼠」は、原文に沿い、説話展開も忠実に引き、典拠の表現を用いながら、巻の表題に合わせて、要約していることが確認できる。

さらに、「鼠物語」は、鼠が王を助けたという事実のみを「又毘舍離国の大王は迦蘭陀と云鼠のつげによて毒蛇の害をのがれ給ふ。迦蘭陀寺の因縁あらた也。」と一文で要約する。この「迦蘭陀寺の因縁」は、巻九・第十五「毘舍離国鼠」が寺の由来譚とする影響であり、巻九の記述からの要約といえる。ここには、原点から説話を採り、自分で記した説話を典拠として、更に要約するという二重の撰取がある。これほど、典拠を重要視しながら、典拠を用いて要約した、自分で記した既出の説話を典拠としていることは、注目に値する。「鼠物語」の記述は、この巻九の説話を想起させる働きをする。読者は、必要に応じて、前出の記述に戻り、確認することが可能になる。これは源を重視する『楊鳴曉筆』の姿勢にも通ずる。

#### (ii) 「頼豪」の記述

これは頼豪が怨念により鼠になった話。これも③の鼠が貴い生き物であることを述べる例の一つ。この頼豪の記述の後に別の例の説話を挙げ、「さしも名高き有験の行者頼豪程の者も」、「まのあたり鼠となり給へば、いやしき身にはあらざるべし。」と総括する。まずは、「鼠物語」の頼豪の箇所を全文挙げる。

又物のおそろしかりしは三井寺の頼豪と云者、勅命により白河院の後兼子中宮の御腹に王子を祈り出し奉り、其勲功に我寺に戒壇建立の事望申ければ、君兼て山門のいきどをりを推せさせ給ふゆへに、御ゆるしなかりしかば、頼豪恨をふくみ、終に干死にし彼王子を取殺し奉りき。敦文親王これなり。さて頼豪の怨念は一の鉄鼠となり山門の学室に入て台教観の書籍を喰やぶり、止観円頓の教旨をほろぼさんとぞしたりける。さてこそ神にはまつりけれ。今の鼠の祠是なり。

この記述からも、頼豪が何故、鼠になったかは理解できる。しかし、後に「さしも名高き有験の行者頼豪」が、何故これほどの恨みを持ったかは、理解が難しい。この「頼豪」の詳細な説話が、卷十三(怨念)・第九「三井寺頼豪」にある。卷十三「三井寺頼豪」の典拠を、市古氏は『平家物語』卷三・「頼豪」とする。しかし、この後半の内容は、『平家物語』には無く、『太平記』卷十五「園城寺戒壇の事」が典拠と言えよう。これは、二つの典拠を用いていると思われる。典拠と比較していくが、『平家物語』テキストは、管見に入つた延慶本、屋代本、覚一本、流布本(三種)を比較したところ、覚一本が、近いと思われるため、覚一本を用いる。また、『太平記』は、『楊嶋暁筆』中の『太平記』を出典とする箇所と比較すると、「梵舜本」に近い。よって「梵舜本」を用いる。また、適宜、私に句読点を付す。

白河院御在位の御時、京極大殿の御むすめ、后に立たせ給て、

循環する物語 (小椋愛子)

兼子の中宮とて、御最愛有けり。主上此御腹に、皇子御誕生あらまほしうおぼしめし、其比有験の僧と聞えし三井寺の頼豪阿闍梨を召して、「汝此後の腹に、皇子御誕生祈申せ。御願成就せば、勲賞はこふによるべし」とぞ仰ける。 (『平家物語』)

白河院御在位の御時、京極太政大臣師実公の御娘、后に立せ給ふ。兼子中宮これ也。主上斜ならざる御寵愛にて、此御腹に王子あらまほしく思召し、有験の僧と聞へし三井寺の頼豪を召して、「汝此後の御腹に王子御誕生を祈り申せ。御願成就せば、勲賞は功に依るべし」とぞ仰ける。 (『楊嶋暁筆』)

『楊嶋暁筆』は『平家物語』の「京極大殿」を、「京極太政大臣師実公」と解説するが、その他は、ほぼ同文である。「兼子中宮」と「兼」の漢字を当て、『平家物語』諸本は「賢子」とする。頼豪を「有験の僧と聞へし三井寺の頼豪」と紹介するなど、細かい表現まで忠実に引く。それに対する頼豪の答えと行動、

「やすう候」とて、三井寺に帰り、百日肝胆を摧て祈申ければ、中宮やがて百日のうちに御懐妊あつて承保元年十二月十六日、御産平安、皇子御誕生有けり。 (『平家物語』)

頼豪「安き事なり」とて寺に帰り、肝胆を碎き祈り申ければ、中宮百日が中に御懐孕有て、承保元年十二月十六日王子御誕生あり。 (『楊嶋暁筆』)

は、頼豪の祈った日数を百日と『楊嶋暁筆』は、記さないが、それは、「中宮百日が中に」とあり、文脈上、理解できるための省略である。

ろう。原文に忠実に沿う事は、明らかである。そして、頼豪が「戒壇建立の事を奏」したことに對しての主上の言、『平家物語』は

「これこそ存の外の所望なれ。一階僧正などをも申べきかところおぼしめしつれ。凡は皇子御誕生あつて、祚をつがしめん事も、海内無為を思ふため也。今汝が所望達せば、山門いきどほつて、世上しづかなるべからず。両門合戦して、天台の仏法ほろびなんず」とて、御ゆるされもなかりけり。

を『楊鳴暁筆』は、『是こそ存の外の望なれ。若汝が望達せば、山門憤て世上静なるべからず』とて御ゆるされなかりければ」と骨子のみを、典拠の表現を用いて要約する。

頼豪はこの後、三井寺に帰つて「干死に」しようとする。それを聞いた主上が、「江師匡房卿」を寺に派遣する。頼豪は会わないが、そのときの理由までは、

「天子には戲の詞なし、綸言汗のごとしとこそ承れ。是程の所望かなはざらんをいては、わが祈り出したる皇子なれば、取奉て、魔道へこそゆかんずらめ」とて、遂に對面もせざりけり。

〔『平家物語』〕

「天子に戲の言なし。綸言汗のごとしとこそ承れ。是ほどの所望叶はざらんには、我祈出し奉る王子なれば、取返し魔道へこそゆかめ」とて、遂に對面せず。

〔『楊鳴暁筆』〕

と、『平家物語』と同じ。そして、『平家物語』はそのまゝ「干死に」したとするが『楊鳴暁筆』はその様子を

其後、頼豪百日が間髪をもそらず、爪をもきらず、嘔患の炎骨を焼き

とする。この記述は、『平家物語』に見えない。(延慶本、屋代本にも無し)これは『太平記』卷十五「園城寺戒壇の事」の

頼豪是ヲ忿テ百日ノ間髪ヲモ不レ刺 爪ヲモ不レ切 爐壇ノ烟ニフスホリ 嘔患ノ炎ニ骨ヲ焦テ

から採る。さらに、それに続く頼豪の言葉

「我願くは即身に大魔王となりて、玉体を悩し奉り、山門の仏法を滅さん」と悪念を起し、終に三七日の中に壇上にして死にけり。

〔『楊鳴暁筆』〕

も『平家物語』には見えず、これも『太平記』卷十五「園城寺戒壇の事」に、

我願ハ 即身ニ大魔縁ト成テ 玉鉢ヲ悩シ奉リ 山門ノ佛法ヲ滅ホサムト云フ悪念ヲ發シテ 遂ニ三七日カ中ニ壇上ニシテ死ニケリ。

とあり、「大魔王」と「大魔縁」の違いはあるが、他は、ほぼ同文であり、『太平記』に拠るといえる。この『太平記』の「頼豪」の話は、園城寺と延暦寺の長い対立の由来を記す中の一部分であり、『平家物語』と類似した話ではあるが、話の展開・細かな内容は、異なる。この後、死んだ頼豪が王子を取り殺すが、その箇所はまた、

白髪なりける老僧の錫杖持ッて、皇子の御枕にたゞずむと、人々の夢にも見え、まぼろしにも立けり。おそろしなどもを



ろかなり。 (『平家物語』)

白髪なる老僧の錫杖にすぎり、王子の御枕にたゞずみ、人の夢にも見へ、まぼろしにも立けり。

と、『平家物語』から採り、さらに、その亡くなった王子が「敦文親王」であったこと、主上が山門の「良信大僧正」に王子誕生を頼み、王子が産まれたことまでを『平家物語』から採る。そして、『楊鳴眺筆』はこの後、頼豪が鼠になったことを

其後頼豪が亡靈忽に鍊の牙、石の身なる八万四千の鼠となりて、叡山の仏像経巻を喰破る。是を防術なし。故に頼豪を一社の神と崇む、今の鼠のほこらはなり。

と、記す。ここは、『平家物語』には無い記述である。市古氏は頭注で『源平盛衰記』一〇、延慶本『平家物語』二本」を類話として挙げるが、延慶本は「大ナルネズミトナツテ、山ノ聖教ヲ食損ジ」たとして、祠を建てたとし、また、『源平盛衰記』卷十・「頼豪成鼠」は「大鼠ト成、谷々坊々充滿シテ」、「弥鼠多出来テ」とおびただし、数の鼠になったため、祠を建てたとする。『楊鳴眺筆』は「鍊の牙、石の身なる八万四千の鼠」になったとしており、これも、『太平記』卷十五「園城寺戒壇の事」

其後 頼豪カ亡靈忽ニ鐵ノ牙石ノ身ナル八万四千ノ鼠ト成テ比叡山ニ登リ佛像經卷ヲ嚙破ケル間是ヲ防ニ无術シテ頼豪ヲ一社ノ神ニ崇メテ其念ヲ鎮ム鼠鬣倉是也  
から採ったといえよう。

循環する物語 (小椋愛子)

以上『楊鳴眺筆』卷十三「三井寺頼豪」は話の展開は『平家物語』を基にして引き、適宜、同類話を持つ『太平記』を用いて、内容を補うことを確認した。二つの類似した内容を持つ説話を対照し、組み合わせることで、より内容の濃い、従来の説話より詳しい内容の説話となる。また、鼠の説話を加え、「今の鼠のほこらはなり。」と結ぶことで、頼豪の説話の信憑性を高め、巻の表題、「怨念」の解釈に合う、「頼豪」の怨念の凄まじさを強調する説話となる。巻の主題に合わせながら、典拠の語を用いた要約をする。組み合わせるが、「創る」ことはせず、典拠に忠実な姿勢が伺える。

さて、この項の冒頭に全文挙げた「鼠物語」の記述は、この鼠になった箇所を「頼豪の怨念は「鉄鼠となり」としている。鼠の話を入れていること、「鉄」の表現は『太平記』にのみあることから、ここは、『平家物語』と『太平記』を組み合わせた卷十三の「三井寺頼豪」の要約といえる。典拠から忠実に引き合わせた話を典拠として、再度、要約という二重の撰取は(i)の例と同様である。さらに、この「鼠物語」の記述は、「頼豪の怨念」と「怨念」を強調することで、怨念の卷十三の「三井寺頼豪」の説話をより想起させる働きをする。

以上、「鼠物語」の例の記述が、既出の説話の要約になっていることを確認した。このように、既出の説話の要約になっている例が、十数例あることから、「鼠物語」の例は、既出の説話を想起させる、『楊鳴眺筆』全体の索引、見出しの働きを考えると考えられる。

二七

但し、既出の記述と重複する内容を持つ例の中で、一例のみ既出の記述よりも、「鼠物語」の例の方が、詳細な記述になっている例がある。次にその例を考察したい。

(A) 帝釈が白鼠となった説話

これも、今までと同じく③で、鼠が貴い生き物であることを述べた例の一つ。先に考察した「頼蒙」の例の次に記す。内容は、「戦遮婆羅門女」が、仏の説法中、仏を中傷するため、腹に木の盃を結び、仏の子を妊娠したとふれ回る。そのとき、帝釈が白鼠に化し、盃を括り付けた糸をかじったため、盃が落ち、嘘がばれたというもの。文末に「西域記にはかゝれたり。」と出典を明記する。「鼠物語」の全文は次の通り。

又仏舎衛にましくて人天大会の為に御法を説給ひしに、諸の外道、仏の御はまれをそねみ、これを破らんとて、戦遮婆羅門女をかたらひ、彼が懐に木の盃を結び付、大衆の中に出し、我仏の御子をはらめりとのかゝりければ、仏も此名は御のがれがたふやおぼしけん、帝釈其会の疑をはらさんとて、化して白鼠となり、彼女の懐にいり、結び付たる盃の緒を喰きり落し給ふ。其糸のきるゝ声、大衆のみゝを震動す。凡聞もの、見る所の貴賤悦はずと云事なし。其時大地俄にひらけ、彼女の全身くだけ其俣無間地獄におちて、其とがをうけけしなり。其穴今に有とかや、西域記にはかゝれたり。

さて、これと同じ話を指すと思われる記述が、卷九(似類)第十三「紺泥駒」の別記文にある。この「紺泥駒」の内容は、釈迦が「みこの宮」の頃、「紺泥駒」という馬で虚空を駆けたというもの。その後、別記形式で、「予昔稚若の時」とし、昔は、この馬の毛の色を知らなかったが、後に「西域記、法顕伝」を見て、白色と知ったとする。そして、「すべて目出度色」は白であるとして、白色の物を列挙する中の一つ、

又天台智者大師の生れ給はんとて、母妾夫の夢に見給ひし鼠、<sup>①</sup> 旋遮婆羅門女が鉢のを、くひ切し帝尺所変の鼠、皆白し。(以下、毛宝の亀、燕丹の鳥、白象の例などが続く。)

右の傍線部分である。「旋遮婆羅門女」と「戦遮婆羅門女」の字が異なるが、同一人物であろう。「鼠物語」の記述は、この箇所の詳細な説話になり、卷九の記述を補う働きをする。今までの見てきた例と逆の形である。

比較していくが、『大唐西域記』のテキストは、『大正新脩大藏経』卷五十一「史(伝部)二」を用い、私に書き下し文を付す。『大唐西域記』卷第六「室羅伐悉底國」の一部分で、

瞿伽梨陷坑南八百餘步有大深坑。是戰遮婆羅門女毀謗如來。生身陷入地獄之處。

〔大正新脩大藏経』卷五十一・P300・上J11-13) (瞿伽梨の陥たる坑の南八百餘步大深坑有り。是れ戰遮婆羅門女如來を毀謗し、生身にして地獄に陷入するの處なり。)

と、「戰遮婆羅門女」が地獄に落ちた穴の由来譚の形を取るため、初めにこの穴がある場所を説明するが、「鼠物語」は引かず、重点を異にする。そして、「戰遮婆羅門女」が仏を毀謗する理由を『西域記』は佛為人天說諸法要。有外道弟子。遙見世尊大衆恭敬。便自念曰。要於今日辱喬答摩。敗其善譽當令我師獨擅芳聲。

(51・P900・上L13-16)

(佛 人天の為に諸法要を説く。外道の弟子有り。遙に世尊を見るに大衆恭敬す。便ち自ら念ひて曰く。今日を要して喬答摩を辱しむ。其の善譽を敗り當に我が師をして獨り芳聲を擅にせしむべし。)

と具体的に記すが、「鼠物語」は、

又仏舍衛にましくて人天大会の為に御法を説給ひしに、諸の外道、仏の御はまれをそねみ、これを破らんとて、戰遮婆羅門女をかたらひ

と、総括する。また、仏の子を妊娠したと聞いた聴衆の反応をも、「鼠物語」は省略する。「鼠物語」は帝釈が「鼠」に化したことが重要であり、信心の強さは、問題ではなかったのである。しかし、一番の重点である、帝釈が鼠となつての行動、

帝釋欲除疑故。化爲白鼠齧斷盃系。系斷之聲震動大衆。凡諸見聞増深喜悅。

―傍線部「系」は、異本に「糸」とするいう『大藏經』の注に従う。

(51・P900・上L19-21)

循環する物語 (小椋愛子)

(帝釋、疑を除かんと欲するが故に、化して白鼠となり糸を齧斷す。糸斷の聲大衆を震動せしむ。凡そ諸見聞喜悅を増深す。) 帝釈其会の疑をはらさんとて、化して白鼠となり、彼女の懐にいたり、結び付たる盃の緒を喰きり落し給ふ。其糸のきるゝ声、大衆のみゝを震動す。凡聞もの、見る所の貴賤悦ばずと云事なし。

(『鼠物語』)

女の言葉が嘘と知れたとき、

是時也地自開坼。全身墜陷入無間獄。具受其殃。

(51・P900・上L22-23)

(是時や、地自から開き坼く。全身墜ちて無間獄に陷入す。具に其の殃を受く)

其時大地俄にひらけ、彼女の全身くだけ其俣無間地獄におちて、其とがをうけしなり。(『鼠物語』)

は、原文の表現を用い、原文に忠実に要約する。以上のことから「鼠物語」のこの箇所は、帝釈が鼠に化したことを重点として、『大唐西域記』巻第六を忠実に引く事が明らかである。原文の表現を用いて引く、この撰取の方法は『楊鳴曉筆』が独立した一話を形成するときの方法と同じである。しかし、「鼠物語」では、それを一つの例として、また、鼠が、使者に語る、会話文の中に用いていることは、『楊鳴曉筆』の他の独立した一話に比べて、より、場に合わせた引用になる。撰取の方法でも、また「鼠物語」の例の記述が既出の記述を補完することからも、「鼠物語」は、『楊鳴曉筆』全体を総括す

る意味を持つ。

#### 四、「鼠物語」に初出の説話

これまで、「鼠物語」の例の内容が、既出の記述と重複する例を見てきたが、「鼠物語」には、『楊鳴暁筆』中、初出の説話も例としていくつか引く。簡単にその中の一つを考察したい。取り上げるのは、③の、「日天子」が地上に降りた例で、先例があるため、「日天子」が地上に降りて結婚しても問題はないことを証明するもの。末尾に割り注で「西域記十二」とある。内容は波利刺斯國王が迎えた妻が、戦乱で、国に入らず、待機していたところ、そこで日天子との間に子を生む。その子は不思議な力を持つ。その子の母は漢土の人、父は日天の種であり、「漢日天種」と呼ばれたという話である。戦乱の月日、王に、妃が「日天子」の子を妊娠していることをどのように告げるかの使臣の困惑を「鼠物語」は省略するが、「鼠物語」が一番に重点を置く「日天子」が降りてくる内容を含む、姫宮の相手は日天子であると、侍兒が王の使臣に語る箇所は、

時彼侍兒謂使臣曰。勿相尤也。乃神會耳。每日正中有一丈夫。從日輪中乘馬會此。

〔大正新脩大藏經〕51・P941・下・L21-23)

(時に彼の侍兒、使臣に謂ひて曰はく。相尤むること勿かれ。

乃ち神の會するのみ。毎日、正に中するや、一丈夫有り。日輪

中より馬に乗り此に會す。)

時に此国の侍兒申侍りけるは、「汝あひとがむる事なかれ、是神會なり。その故は此程毎日午剋ばかりに日輪の中より独のおのこ馬に乗じてこの宮の内へくだり、其なす処なすべし。」

〔鼠物語〕

と、原文を訓読の形で忠実に引き、さらに、生まれた子の様子も、容貌妍麗。母攝政事。子稱尊號。飛行虛空控馭風雲。威德遐被聲教遠洽。隣域異國莫不稱臣。

(51・P941・下・L28-P942・上・L1)

(容貌妍麗。母、政事を攝し、子、尊號を稱す。虛空を飛行し、風雲を控馭す。威德は遠く被り、聲教は遠く洽し。隣域異國臣と稱せざるもの莫し。)

容顏妍麗にして形色端嚴なり。母は政をおさめ、其子をば尊號を稱す。虛空を飛行し、風雲にのれり。威風はるかに境外におほひ、声教普く隣域にうるほふ。

〔鼠物語〕

と、原文の表現を用いた撰取であり、さらに「漢日天種」と呼ばれた理由をもほぼ同文で引く。

以上の事から、「鼠物語」に『楊鳴暁筆』中、初めて記す話は、『楊鳴暁筆』中の独立した一話と同様、典拠を重視し、詳細に記すと言える。これは、既出の記述よりも、「鼠物語」の例の方が、詳細な記述になっていた(A)の帝釈天が白鼠となった説話と同じく、他書を典拠とした場合の『楊鳴暁筆』の撰取の方法であろう。但し、

ここでも、同様、独立した一話でなく、会話文の中に例の一つとして引く。「鼠物語」全体の大きなプロットと直接に関わらない形で個々の説話を組み入れるもので、『楊鳴暁筆』の説話の引き方として、より進んだ形といえる。

## 五、まとめ

以上、「鼠物語」の例のうち、とりわけ、その内容が、既に『楊鳴暁筆』中に記述がある、重複する内容を持つ例を中心に考察した。そして、その例が、既出の記述の要約になっていることを確認した。このような例が十数例あり、「鼠物語」の全体の、話の展開、プロットには、直接関わらない形で、引かれることから、それらの例は、『楊鳴暁筆』全体の索引、見出しの働きをするといえよう。そして、読者に既出の説話を想起させる働きを持つ。読者は、必要に応じて、連想から前に戻り、確認することができる。これは、「鼠物語」の内容、「元に戻る」と合わせて、『楊鳴暁筆』全体の読み方を示唆し、読みの循環を促し、さらには、全体を回顧する働きをする。故に「鼠物語」は、『楊鳴暁筆』全体を述懐する、まとめともいえよう。また、ここには、原典から忠実に要約する形で引いた既出の説話を典拠として、更にそれを要約するという二重の撰取があることも指摘した。自分で記した説話を典拠として引くことは、注目に値する。「鼠物語」に既出の記述を補う説話を挿入していることから、

作者が「鼠物語」を最終話として、全体を補う意識を持っていたことがわかる。また、この既出の記述を補う説話や、『楊鳴暁筆』中、「鼠物語」に初出の説話の、典拠の用い方は、独立した一話を形成する方法と同じである。しかし、「鼠物語」では、独立した一話とするのではなく、会話文の中に、例の一つとして引く。これは、より進んだ、積極的な撰取となる。

また、「鼠物語」で、『楊鳴暁筆』の書名の由来を説くことは、最終部で、書名を述べる漢籍の体裁を意識しており、作者が最終話の意識を有していたことは、明らかである。さらに、「鼠物語」の構成では、末尾に「狂言綺語」、「菩提の讚仏乗の因、転法輪の縁」とし、形式上、全体の結びになっている。「鼠物語」は、形式上、説話の引き方の両面から全体の総括、総まとめであるといえ、『楊鳴暁筆』中、重要な位置を占めるといえよう。

## 注

- (1) テキストは市古貞次校注『楊鳴暁筆』(中世の文学)三弥井書店に拠る。
- (2) 昔話「土童の嫁入り」と同話。(大成三八〇、AT2031)野村純一編『昔話・伝説必携』學燈社(一九九三年・六月)に拠る。
- (3) 「鼠の嫁入」が女子教育に用いられたことは、小谷成子「赤本『鼠の嫁入』とその意義―江戸時代の女子教育の流れの中において」(愛知県立大学説林)29 昭和五六年二月)に詳しい。また、書名に関しては『国書総目録』に依る。

(4) 『沙石集』の巻は、内閣文庫本に拠る。諸本異同があり、お茶の水図書館本では、巻七、米沢本では、巻九に相当するが、お茶の水図書館本、米沢本には、鼠の話は無い。

(5) 『沙石集』は、内閣文庫本を用いる。テキストは、土屋有里子編『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』笠間書院（平成十五年三月）に拠る。

(6) これは、『楊鳴曉筆』全体に見られる特徴で、王侯貴族、將軍などには、必ず敬語を用いる。典拠とするものに、敬語がない場合でも、用いて、典拠よりも敬意を表す。

(7) 『平家物語』の引用は、山下宏明校注・新日本古典文学大系『平家物語』・岩波書店に拠る。

『楊鳴曉筆』と『平家物語』の覚一本、葉子十行本、下村時房刊本、元和七年刊本を比較したところ、覚一本に近いと言える。一例のみ挙げ

有驗の僧と聞へし三井寺の頼豪を召して、「汝此後の御腹に王子御誕生を折り申せ。御願成就せば、勲賞は功に依るべし」とぞ仰ける。〔『楊鳴曉筆』卷十三「三井寺頼豪」〕

其比有驗の僧と聞えし三井寺の頼豪阿闍梨を召して「汝此後の腹に、皇子御誕生祈申せ。御願成就せば、勲賞はこふによるべし」とぞ仰ける。

（覚一本）

其の比三井寺に有驗の僧と聞えし頼豪阿闍梨を召して、「汝、此の後の御腹に、皇子御誕生祈り申せ。御願成就せば、所望は請ふによるべし」と仰せ下さる。〔葉子十行本〕

その比三井寺に有驗の僧ときこゆる頼豪阿闍梨をめして、汝此後の御腹に皇子誕生祈り申せ、御願成就せば所望はこふによるべしと仰下さる。

（下村時房刊本）

其の頃三井寺に、有驗の僧と聞ゆる頼豪阿闍梨を召して、汝此の後の御

腹に、皇子誕生祈り申せ。願成就せば、所望は乞ふによるべしと仰せ下さる。〔元和七年刊本〕

テキストは以下の通り。「覚一本」は、注3参照。「葉子十行本」は、富倉徳次郎校註・日本古典全書「新訂 平家物語 上」朝日新聞社（昭和四十八年六月第四刷発行）に拠る。「下村時房刊本」は、日本古典文学全集『平家物語 上巻』日本古典全集刊行会（大正十五年十月）に拠る。「元和七年刊本」は『昭和校訂平家物語流布本』武蔵野書院（昭和十三年四月・訂正再版発行）に拠る。

(8) 『太平記』を典拠とする『楊鳴曉筆』の説話が、梵舞本と近いことは、拙稿『楊鳴曉筆』における『三國伝記』の位置（愛知淑徳大学国語国文）第27号・二〇〇四年）の注で考察した。『太平記』のテキストは古典文庫『太平記・梵舞本四』に拠る。

(9) この箇所も、「葉子十行本」、「下村時房刊本」、「元和七年刊本」は百日との表現は一切無く、覚一本に近いといえよう。

(10) テキストは『平家物語』延慶本北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語本文編』勉誠社（一九九六年二月）、『源平盛衰記』は松尾葦江校注『源平盛衰記二』（中世の文学）・三弥井書店（平成五年五月）に拠る。

(11) この天台智者が生まれたときに、母の夢に見えた鼠の記述は、「鼠物語」にも、

「又もろこしには徐氏といふ人、或夜の夢に白き鼠を呑と見て、遂に独の子を生給へり。天台智者大師是なり。」と、「鼠」がいかに貴いかを述べる例証の一つとしてある。この詳細な説話は、巻五・第一「天台」にある。